

ご挨拶

同志社グリークラブ OB 会
副会長 山下裕司

6月18日に行われました「同志社グリークラブOB総会」におきまして、副会長を拝命いたしました1977年（昭和52年）卒業の山下裕司です。よろしくお願いいたします。

副会長といえば文字通り、会長の補佐が主たる役回りとわきまえていますが、この度新しく会長に就任された森島敏夫さんとは、現役グリーでは幹事長と学生指揮者の間柄で（当時は四連が終わると執行部は3回生にバトンタッチ、4回生は指揮者のみ定期演奏会まで居残りというシステムでした）練習終了時にカレソンを私が振り、森島幹事長がチェアを唱えるということ、それこそ毎日やっていた記憶があります。また卒業後もOB会やクローバーで度々ご一緒させて頂き、どちらかというといつも私の方が助けてもらっていた関係だったように思います。

私が初めて男声合唱に触れたのは同志社香里高校に入学して間もなく、講堂で行われた新入生の為のクラブ紹介でした。当時の香里は男子校で、制服は学生服、意外ですが私には少し硬派のイメージでした。壇上でオルフォイス・グリー・クラブが黒人霊歌の”Soon-a will be done”を演奏した途端、「鳥肌」でした。中学はテニス部だったので、どちらかという「ヒヤカシ」半分で聴いていたのですが。

そこからは合唱一筋、高校では野尻湖の夏合宿や厚生年金会館での定期演奏会、大学では演奏旅行に四連、定期は昔の京都会館第1ホール、メサイアは京都・広島・神戸へと。まさに「青春＝グリー」でした。1974年には第4回世界大学合唱祭参加という貴重な体験を与えていただき、1ヶ月に及ぶアメリカ・コンサート・ツアーは何よりも得難い財産に今もなっています。またオルフォイスでは西邨辰三郎先生、大学グリーでは福永陽一郎先生、大久保昭男先生、素晴らしい先生方のご指導をいただき、充実したグリーライフを歩めたことは本当に幸せなことでした。

これまで私がグリーの「とりこ」になったさわりの部分を書いてみました。まだまだ書きたいことは山ほどあるのですが、この辺りで一旦話を戻します。

今の私の希望（やりたい事）、現役・OB どちらにも言えることですが、魅力的な同志社グリーで常に在ってほしいと願っています。合唱の魅力とは、一言で言うなら「聴いてみないとわからない」であり、「聴いてみてもわからない」だと思います。一緒に声に出してみ、その重なりに体の奥底から湧き上がる「感動」が感じられるか？でしょうか。先日のOB四連合同で「月光とピエロ」を歌いました。1曲目「月夜」の冒頭、G-Dur 10度のハーモニーに未だにゾクゾクする自分がいました。やっぱりいいですね。OBの皆さん、もっと一緒に歌いましょう。